
シフト - 真理を映す目 -

raki & 竜司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シフト - 真理を映す目 -

【Zコード】

N1754P

【作者名】

raki &竜司

【あらすじ】

作者 : raki

その日に映つたのは、時の逆行だった

狂喜する少年、恐慌をきたす女、伝染する医者、推論する精神学者、世界を転換する生物学者、そして真実を追う記者。

六人のエピソードは、次第に一つの答へと収斂する。

人類に下された「審判」は世界にどんな変化をもたらすのか。

今、見つめ直すべき人間の在り方とは。
全てが今、シフトする。

人類と宗教の在り方を問うサイエンスホラーです。

『注意』

- * この作品には、聖書を否定・非難する内容が含まれています。不快に感じるおそれのある方はご注意ください。
- * この小説はブログや他小説サイトにも掲載しています

神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

旧約聖書 第一章 二十八節

古代ギリシアの哲学者アリストテレスはこう主張した。「動物は感覚性を有する生物であるが理性を欠いており、自然界におけるヒエラルキーの中では人間よりはるか下位に存在する。したがって、人間の目的の為の用途として、自由に使える資源なのである。動物は理性的な魂をもっていない。動物に対する人間の取り扱いには、あらゆる正義に関わる問題を生じないのだ」と。

そして彼だけではない。ローマ末期最大の教父アウグスティヌスやイタリアのスコラ哲学者トマス・アクィナスも動物の理性の欠如が、人間への従属を正当化すると主張した。

聖書はこのような人間観、そして動物観を、歴史に強く刻みつけた。

PROLOGUE - The Old Testament (後書き)

プロローグです。

次話からが本編ですが、このプロローグも後に重要なになります。

「赤点の山を眺めながら狂ったように笑う僕が目に浮かぶようだよ……」

少年はぐすんだ瞳を夜空に向けた。

それを見た灰色の猫は、鼻で笑うように部屋を出て行った。優雅に尾を振り、部屋を出て行く様は、まるで人間を見下しているようだった。

彼は常々考えていた。高等学校で学ぶ「勉強」というものが「勉強ごっこ」に過ぎないのではないか……と。学生の本分は、紛れもなく学ぶことにあるだろう。しかしながら、学ぶ内容は正しく選ばねばならない。彼は、現在強制されている「勉強」が、自分が本来学ぶべきものと相反するものであると感じていた。

「くだらない。テストと課題で僕を振り回して、僕の時間を奪つていいく……。あの御方なら、きっと解つてくださるだろうこ……」

少年は自分の最も尊敬する人物を思い浮かべ、そう言った。
そこでふと、彼は時計を見た。

「！」

彼は目を疑つた。

少年の目には、時計の針が逆回転しているように見えたのだ。

しかし、見れば見るほどその光景は鮮明な映像となつて目に焼きついてくる。

彼は目をこすつた。この眼前の異常を簡単に受け入れることが出来るはずがない。簡単に受け入れてしまえば、それは自らの「異常」を認めるようなものである。

「幻覚だ。そうだろ……。時間が戻るわけがない」

少年は咳きながら、再び時計を見た。

「嘘……だろ……？」

時計の針は逆回転していた。速度はゆっくり、しかし加速度的に

「ははは」
少年にはただ笑うことしか出来なかつた。疑いを向けることすら出来なかつた。目の前の光景が眞実であると、彼は直感的に感づいていた。

この時、少年は追い詰められていたのだ。期末試験は明日に迫っていた。勉強が追いつかないのは解っていた。彼には時間がなかつたのだ。そこで……時が戻つた。

それは「禍の業」であると少年は疑わなかつた。田嶋の信仰力

卷之三

「八八八八！」

— ! !

少年は思い切り振り向いた。自分以外の誰かが、背後で笑つたよう

「勘違いか」

少年は不気味に微笑した。

彼は携帯電話の画面を見た。液晶に映し出された現在時刻は、目まぐるしく変化していた。数字が増減を繰り返す。しかし、それは時間の逆行を表していることに相違なかつた。

「戻ってる！ 戻ってるぞ！！」
少年は笑った。残り十一時間と、差し迫っていた試験開始時刻か
らはもう、一日以上離れていた。

少年は笑いすぎて噎せ返った。すぐに、テーブルに置いてあつたペットボトルのお茶を手に取り、喉に流し込んだ。

少年はだんだんと落ち着きを取り戻していった。しかし、すぐに興奮が舞い戻ってきたのが分かった。

気付くと、三日前の朝日が沈み出していた。

朝日が沈み行く様を見るのは、もちろん初めてである。それは想像以上に美しかった。彼の意識は、次第に「神」という存在に収斂しうれんしていく。

少年はハッキリとした口調で、叫んだ。

「僕は、神に選ばれたあ！！！」

少年は窓を開け、再び大声で笑い始めた。

彼にはもう、世界が巻き戻る様しか見えていなかつた。

……そう、もう見えやしなかつたのだ。

異常に気付いた隣人が警察に電話を掛ける、その姿など。

EPISODE? - Rapture (後書き)

読んでくださった方に感謝します！

僕、今ちょうどテスト前なので、このページは洒落にならないです（笑）

さて、この小説は完結するまで毎日更新します。

とはいって、予約投稿を使うので、おそらくテストの関係もあって、次にパソコンをひらくのは完結後になると思います。

なので、「感想」、「質問」、「指摘」に関してはすぐには返答出来ませんので、「どうか」「承ください」。

ミスがあつたときすぐに修正できないのは痛いのですが・・・

「あ、あ。あたしも、明日で三十歳か……。早かつたわね……」
尚子が細い指で缶ビールのタブを開けたは、一階の寝室のクオーツ時計が午後九時を差した頃だった。何気なく、彼女は時計を見つめた。

このクオーツ時計は、二年前に尚子がこの家に引っ越してきた際に購入したものである。大手時計メーカーの商品であるが、値段は一万二千六百円と、当然高級というほどでもない。購入後、ネット販売で売っていた同製品の値段が八千八百円であって、少々の落胆をした記憶など、彼女の脳内からは煙のように消えていた。

結婚もしないで住宅団地に家を買った尚子を、彼女の友人たちは揶揄^{やゆ}していたが、彼女にとつて自分が静かな場所を確保することは何よりも優先されるべきことであった。幼い頃から、何かと一人で居ることを好んでいたのだ。友人関係を壊さないだけの最小限のコミュニケーションが彼女にとつての「会話」である。明日の誕生日もまた、「最小限のコミュニケーション」が出番を迎えるイベントであった。

「……孤独つて嫌だわ」

尚子は閉ざされた窓のすりガラスを見て呟いた。

それは彼女が一人暮らしの寂しさを嘆いた言葉ではなかつた。

彼女の中で「一人で居ること」と「孤独」とでは、意味が大きく違つていた。彼女は常常思つていた。「一人で居たいけど、孤独は嫌だ」と……。家族も友人も居てほしいけれど、彼らがプライベートに深く干渉するのは不快だ、それが彼女の心情であった。

窓の向こうには、隣家がある。尚子はその家のことを、正しくはその家に住む親子のことを考へると、「孤独」への嫌悪を感じるのだ。

隣人は少々珍妙であった。

「最小限の『ミニコニケーション』を心に決めている尚子がたつた一度だけ近所の井戸端会議に参加したことがあった。その起因となつたのが、隣の一家の行動であった。

その一家は父、母、子の三人家族である。しかし、尚子が見たことのあるのは一人息子の高校生だけだった。引っ越ししてまもなくは何も不思議に思つてはいなかつたが、それが数ヶ月続けば異常である。

近所の噂好きの主婦たちに因れば、母親は週に二、三度帰宅するそうだつた。何をしているかまでは不明であるが、決まって帰宅するのは深夜で、何やら如何わしい生活をしていることは間違ひなさうである。父親に関しては誰一人目撃したことはなく、その理由は海外出張であるらしい。

つまりは、高校生の息子は一人で生活をしているに等しかつた。その息子が、しつかり者で心優しく、爽やかな好青年ならば同情のしようもあるだろう。しかしながら、彼もまた非常に怪しげな存在なのだ。

彼は至つて普通の高校生である。普通すぎて取柄のないというような学生。すれ違えば弱々しいがそれでもしつかり挨拶をするし、外見も少々地味ではあつてもまともである。

ただ一つ、たつた一つだが、見るものをギョッとする妙な行動があるのだ。

彼は毎月決まつた一日だけ、高校を休むのだ。その月の十五日、何曜日であろうと必ず十五日が来ると、彼は早朝からどこかに出掛けてしまう。それも、全身黒死くめの出で立ちで。夏でも漆黒のコートを羽織つて

その姿は、怪しげな儀式を思わせるものであつた。それを見た誰もが、不快感を覚えるであろうその氣味の悪さが隣家に住まう親子と近隣の住民の『ミニコニケーション』をほとんど遮断しているようだつた。

尚子は、隣の学生の奇行は母親との関係にあると勝手に推測して

いた。母親に対する不信感や反抗心、そして孤独感があの奇怪な習慣を彼に植え付けたのである。「……と。

「アレ」を見てしまったと孤独が本当に嫌になる、尚子は以前友人にそう話したことがあった。彼女は彼に、底知れない恐怖を感じ取っていた。

隣の学生が黒い「コード」を着て自宅から出て行く光景を思い出して、尚子は一気に疲弊した。寝そべって軽く目を閉じると、彼女は激しい眠気に誘われた。

数秒経つて、尚子は眠りに落ちた。

「…………っ！」

声になりきれていない音を発して、尚子は目を覚ました。

「…………な、何！？」

けたたましい声が家の外から聞こえてくる。

それは人の声であり、叫びであると、尚子は瞬時に理解した。彼女のまどろみを一瞬で払つたのはビックやらこの「叫び」であつたようだ。

「何の騒ぎ…………？」

少なくとも酔っ払いが叫んでいるといった様子ではなさそうである。

「…………笑い声」

冷静になつてその声を聞くことで、それが「笑い声」であると気が付いた。

彼女は得体の知れない笑い声に恐怖を感じていた。その笑い声は、人間の笑い声とは到底思えないものだった。

「あつ…………」

急にその笑い声は止んだ。再び夜の静寂が戻ってきた。

尚子は窓を開けて外を見るべきか悩んだ。しかし、彼女の好奇心はいつもたやすく恐怖に呑み込まれていった。関わるべきではない

と心が叫んでいたようだった。

ガラガラッ！！

不意に近くで窓が開かれる音がした。音は極近い所でなったようだ。

「まさか……隣？」

隣家に住む学生の部屋の窓は、尚子の家の寝室の窓と向かい合つような位置にあった。窓と窓の距離はかなりあつたし、高低差も僅かにあつた。しかし、鮮明に窓を開く音がすれば、それはあの学生の部屋の窓が開かれたことに相違なかつた。

一瞬、尚子は隣の学生があの奇声を上げていたのではないかと思った。しかし、あの陰気な学生があのようなけたましい笑い声を上げるとは到底考えられなかつた。どうやら、笑い声を聞いて窓を開いたようである。

そう結論付けた刹那、再び仰々（ぎょよつぎょよつ）しい笑い声が住宅団地に響き渡つた。

「ひつ！…」

尚子は驚いて声を上げた。

叫びとも取れるその笑い声は、止む気配もなく大気を震わせていた。その声は先程のものよりもより鮮明で強大であつた。それが意味することは、唯一つである。

「住宅団地に響き渡る笑い声は隣家の学生のものである」

尚子の恐怖はピークに達していた。

何なの！？あの子、薬でもやつてたつていうの！？

彼女は再び学生の黒尽くめの姿を思い起こした。なるほど彼は、出掛け先で薬物を買つていたのだ。それならば、納得がいく

尚子は半ば無理矢理にストーリーを作り上げた。それでもしなければ、自分に危険が及ぶのではないかという不安に引きずり込まれそうだったのだ。

アーヴィングは電磁の取扱い器を手に取った。警察に来てやるね

ブルルルルルル……ガチャツ。

『——おはようございます。お電話で、お問い合わせいたしましたが、』

「と、隣の家の高校生が変なんです！」

『寝……と書こおゆと?』

!! すぐ来てください!!

『アーネスト・ヘミングウェイの世界文学』

「は、せー！」

警察は電話番号から住所を特定出来るが、彼女の言葉のニュアン

向子は董かに安心感を覚えた。

『そちらには既に担当が向かっておりますので、『安心ください』

「はい……分かりました」

女性は謎の確認をした。尚子にはその質問が何を意味するのか解

らなかつた。

『ええ、何ですか？』

『声の主は本当にその高校生なのですか?』

「……見てはこまやんが、おれいへせ……」

Γ

尚子は女性の質問に苛立ちを隠せなかつた。その言い方は、「頼

「……やつてゐます」

そう言つと、受話器を片手に這う様にして窓へと近付いた。依然として笑い声は発せられ続けていた。窓を開ければ、五、六メートル先に笑う少年の姿があるはずだ。

ゆっくりと、すりガラスのはめ込まれた窓を開けた。開かれたのは五センチ程度であるが、覗き込めばはつきりと見える位置に窓は設置されている。

「何でこんなこと、あたしが……」

嘆きながらも、尚子は窓の隙間を覗き込んだ。

「…………ツツ……！」

窓の向こうには、恐ろしい光景が広がっていた。

けたたましく笑っていたのはやはり隣の学生であった。しかしその姿は、まるで魔に取り憑かれたかのようである。目をカツと見開き、手を広げて天を仰いでいる。充血したその目は、獣の眼光の如く鋭く、狂気に満ちていた。

尚子は恐ろしくなつて、受話器を放り投げ、後退りするようにして窓辺を離れた。

「何なの、あれ…………！」

彼女は一一〇番に電話が繋がっていることも忘れ、その場で身震いしていた。

何分か経過して、外でサイレンの音が聞こえた。警察が到着したようだ。

隣人は未だ笑い声を上げている。尚子はすっかり憔悴じょうすいした様子で、遠目に窓を見つめた。僅かに開かれた窓からは何やら明るい光が入り込んでいる。

「朝…………？」

そんなはずはなかつた。確かに今は午後九時から午後十時の間、つまり夜であるはずだ。

しかし、夜ではあり得ないほどの光が外を照らしている。まるで

朝を迎えたかのような柔らかな光だ。

尚子は現在時刻を確認すべく、壁に掛けられたクオーツ時計に目をやつた。

「.....??」

彼女の目には、ゆっくりと針が逆回転する奇怪なクオーツ時計がはっきりと映っていた。

EPISODE? - Infection

精神科医、桐崎義光きじまさきよしむつは酷く焦った様子でノートパソコンを開いた。それは、ある症状に關する記録を、中森という同じ精神科医である友人にEメールで送るためであった。彼はその症状を発症した患者を診察するために、もう二日間睡眠を摂つていなかつたが、もはや休んでいる暇は無かつた。

そもそも、この記録を作ることになったのも、その症状の患者が警察から彼の病院に輸送されて来たのが事の発端である。そんなことは二十数年も精神科医を続けてきた桐崎でも初めてのことだった。「一体何故、こんな事が起きたんだ……！？」

桐崎は独り、疲れた声で呟いた。その声は空調の効いた部屋に僅かに響き、そして空むなしく消えていった。

そして、桐崎はEメールの本文制作画面を開き、キーボードを叩き始めた。カタカタという音を立てながら桐崎の両手の指がキーボードを走る。

彼はふと部屋の壁に掛けられた振り子時計を見上げた。時計の秒針はゆっくりと右に向かって回っている。

「…………まだ猶予はある…………か。くそつたれが…………！ 賴むからこいつを書き終えるまで何も起こらないでくれ…………！」

桐崎は腕時計を視界に入る位置に置き、パソコンのディスプレイに視線を戻した。

謎の症状に関する報告書

中森、この報告書を見たら、直ぐに行動を起こしてください。出来

るならば私も自ら動きたいが、おそらくこの私にもあまり多くの時間が残されているとは思えない。

今からお前が読むものは、決してフィクションでも不謹慎な冗談でもない。全て事実であり、何とかしなければならない問題だ。この言葉が、後に大袈裟な言葉だつたと言われるか、正確な予測であつたと言われるかは、現時点では判らないし、私には知る術もないことであろうが、敢えて言つておこう。

これは人類の歴史の岐路になりうる問題になるかもしない。その諸悪の根源はある症状だ。その症状は極めて珍しかった。：

…否、新しかつたのだ。

その症状を発症したのはある住宅団地に住む高校生だつた。突然大声で叫び、近隣の住民に通報され、警察が身柄を捕らえたのが今月の十六日の晩のことである。担当の警官の話では、意味の解らない独り言を延々話し続け、取り調べもできない状態だつたという。精神が壊れていることは誰の眼にも明らかであり、警察は一種の異常さを感じ取り、翌日十七日、精神科医である私の元へその高校生を送つてきたのである。

私の診察に際し、彼は興奮した様子で妙なことをずつと言い続けていた。

時が戻つている

彼の目には、この世界の時が逆行しているように見えているようだつた。

私がその高校生を診察したとき、それは単なる幻覚であると診断出来た。そして警察には薬物の使用があつたか検査するよう指示するつもりだつた。

しかしながら、数刻もしないうちに、もう一人患者が運ばれて來たのだ。

その患者は三十歳のOしだつた。なんでも、最初に来た高校生の

住む家の隣家に住む女性だそうだ。そして驚くべきことに、彼女には高校生と同じ症状が起こっていた。

彼女は高校生と違い、幾分冷静に状況を話すことが出来た。彼女の話では、最初に自らの異変に気がついたとき、目に映る時間の逆行は緩やかで、現実の光景に強く依存したものであったという。つまり、時間の逆行には二段階の症状があるようだった。

初めに、自分の見ている現在の風景の「時間概念」のみが逆行する。正確には、時間概念により直接的に結びついているものだ。例えば、時計がそうだ。時計の針の逆回転、デジタル時計なら数值の変化、砂時計ならば砂が下から上へと上がる、といった具合だ。そして太陽光もその一つだ。太陽光の与える朝、昼、夜の変化も時間と密接に繋がっている。

それらが全て本来の流れと逆に流れていいくように見えるようだ。次に、発症者の記憶に蓄積した時間が巻き戻る。しかし、この症状に関しては不確かなことが多い。

第一の症状は加速度的に巻き戻しのスピードを上げる。その速さが一定の速さを超えると、時間概念との関係が薄い光景も遡っていく。

その症状が広がっていくと、最終的に自分の人生を逆再生した映像を見ているかのような状態になる。

つまり、この段階に達した発症者は、完全に現実の映像を見られなくなる。視覚が奪われるのだ。

幸いしたのは、聴覚に関しては一切のダメージが無かつたことだ。一人目の発症者である高校生は精神に異常をきたしていったが、二人目の発症者である女性は若干の混乱はあるものの、詳しい症状を聞くことができた。

その日、私は発症者二名を入院させた。この時点では、珍しい症状の患者が二人も同時に出了ことに驚くばかりだったが、後にこの感情は単純に恐怖に変わつていった。

十八日、午前のうちに前日の発症者二名と同じ症状の患者が四人

運ばれてきた。全員、初めの一一名の発症者の住む住宅団地の住人だつた。ここで私はある仮説を立てた。この症状は伝染するのではないか、と。しかし、精神病の類であるならば、それが感染する可能性は薄くなる。仮に、脳に細菌が侵入し、患者全員に同じ症状を発症させているならば、感染のしよつもあるが、それにしたつて奇妙だ。感染力が強すぎる。飛沫感染のレベルを大いに越えている。

十九日、謎を残したまま感染は広がつた。

今度は一人目の発症者である高校生を取り調べた警察官だつた。三人の警察官が続けざまに運ばれ、次いで十数時間後には前日十八日に運ばれた団地の住人の家族、そして警官三人の家族が、同じ症状で運ばれてきた。

「ここ」で私は確信した。確信せざるを得なかつた。これは間違いない、「感染」だ、と。

そして同時に私は恐怖した。これが感染ならば、私はどうなのだ？ 全ての患者と顔を合わせていい自分が、同じ症状に感染しないとは限らないのではないか？

翌二十一日、私は遂に恐ろしい事実を知ることになった。
十六日に発症した高校生と三十歳の女性が死亡したのだ。それが何を意味するのか、私には十分に分かつていた。
発症したら最期、死に至るということだ。

この症状が感染するとして、発症までの潜伏期間は患者によつてまちまちである。例えば、死亡した女性は高校生を介して感染したとすれば、数分間という短時間で発症に至つたことになる。
私自身が感染していたとしたら、今は潜伏期間ということだ。つまり、四日間発症しなかつたことになる。

この症状は一体何なのだ？ もはや、私の手に負える問題ではない。

この謎の症状が国中に蔓延したらとんでもないことになる。

私は感染したかもしれない。この症状を発症した何人もの患者を診てきたのだ。

中森、頼む。この症状の謎を解明してくれ。そして、感染をストップさせるんだ。私にはどのくらいの時間が残されているのか、見当も付かない。私が死んだなら、そのときはお前がこの事件を止めらるんだ。

桐崎義光

桐崎は汗が滲む額を白衣の袖で拭った。

震える指でマウスに手を置き、画面上のカーソルを「メール送信」のボタンに合わせ、静かにクリックした。

「……頼んだぞ、中森」

桐崎には、自分が感染したという予感があった。瞳の奥が熱く熱を持ち、死の感覚が脳から離れようとしているのだ。

桐崎は時計をじっと見ていた。

彼の目に映る時計の針はまだ、右に回っている。

渡部秀真はコーヒーをすすりながら、昼下がりの研究室の小さな椅子に腰掛けた。

「暇だな……。誰か大それた事件でも持ち込んでくれないものか…」

生物学のエキスパート、学問に携わる者なら知らないものはないであろう彼は、大学教授が警察に協力し天才的な発想で難事件を解き明かすような絵空事の主人公に自らを重ねて楽しんでいた。

来年で四十四歳の渡部だが、彼の類稀なる優秀な頭脳に対して、世界の評価は冷たかつた。理由は誰の目にも明らかであつた。いわゆる変人。彼とともに、「楽しく」会話できる人類は限られている。彼の助手数名、彼の大学時代からの親友である精神医学専門の医学者、そして、現在の日本の内閣総理大臣である花沢昭一くらいである。

花沢昭一は、総理になる以前から渡部と交流があり、渡部は選挙の度に応援演説をしていた。渡部の一風変わった性格や、斬新な視点で書かれた著書は一般人にはある程度の人気を持っており、花沢の議員としての知名度や、好感度などは、ほとんど渡部が作り上げたといつても過言ではなかった。

そのため、渡部は総理大臣との太いパイプを持つている。

渡部は、そのような「繋がり」を掲げて、勝手に研究室に設置した四十一インチの薄型テレビの電源を点けた。助手が居ない研究室はあまりに静かで、渡部は居心地が悪くなってしまったようだつた。このテレビも当初は超巨大液晶のものが取り付けられる予定であったが、さすがに非難を受け、「それじゃあ液晶を小さくするからいりでしょ」と訳の解らない理論を呈して半ば強引に取り付けられた

ものである。

そんなテレビから、耳を疑うようなニユースが飛び込んできて、渡部は仰天した。

『……最新のニユースです。一九〇五年、奈良での捕獲を最後に姿を消し、絶滅したと思われていた二ホンオオカミが、群馬県×××市の山間部で発見されました……』

ガタツ。

思わず渡部は勢いよく立ち上がった。

「馬鹿な…………!! 二ホンオオカミが今頃だと!? そんな話初耳だぞ！」

渡部はしばらく思考を巡らした後、落ち着きを取り戻し、椅子に腰を下ろした。

「二ホンオオカミ…………、剥製ですら世界に五体しかない絶滅種だぞ。信じられん……。

渡部は別のニユースに切り替わった後も、テレビ画面を眺めていた。コーヒーの湯気が画面を仄かに歪ませている。

プルルルル……。

「…………ああ？」

渡部は電話の音で目を覚ました。どうやら、ぼーっとしている間に寝てしまつたようだつた。

渡部は早歩きで電話に近付くと、乱暴に受話器を取つた。

「もしもーし、どなたかな?」

「…………

受話器からは誰の声も聞こえなかつた。聞こえるのは何故か電話の「ホール。

「ああ、やべつ……」

電話の音は渡部の白衣のポケットから聞こえていた。信じられないことに、携帯の着信音と固定電話の着信音を聞き間違えたのだ。

渡部がポケットから携帯を取り出すと、画面には「工書店編集者
田中涼子」の文字が映っていた。しかし、渡部は画面を見ることなく通話ボタンを押してしまった。

「もしもし」

「工書店編集者の田中です」

「……誰？」

渡部の四十二歳とは思えない無骨な対応に、電話の向こうの田中は呆れているようだつた。

「ご冗談を。渡部先生、執筆の調子はいかがでしょ？」「

「執筆？ 何だね、それは？」

「まさかとは思いますが、一行も書いていないということはないですかね？」

渡部は記憶を呼び覚ますかのように、天井を見上げた。

「ああ……」

渡部は恍けた声を上げた。記憶が徐々に蘇る。

「先生、何ですか、その嫌な予感しかしない感嘆詞は」

田中の声を聞くうちに、渡部の記憶は鮮明に復元されていった。数ヶ月のこと、今電話をしている田中という女性が訪ねてきた。彼女は渡部に本を書かないかと誘いに来たのだ。

テーマは「別視点の生物学」。変人と呼ばれる渡部の斬新な視点から書かれた生物学の本を出版することを、田中は狙っていた。渡部はその日、禁煙を諦めてタバコを解禁し、気分上々であった。その上、この田中という女性がまた面白く、若いのに話しの分かる人間であつた。渡部は無論、そそのかされて快くその仕事を引き受けたのだ。

「うんうん……。も、もちろん書き終えたよ、田中ちゃん」

「いつ書き終えますか？ 渡部先生」

「書き終えたと言つてているじゃないか」

「嘘です」

「僕が嘘をついたことがあるかね？」

「私は一度しか会つておりませんよ、先生?」

「…………」

田中は完全に渡部の心を読んでいた。

「締め切りはいつだつたかね?」

「一週間後ですね」

「…………わ、分かつた」

「ちなみに今どれくらい書いてましたか?」

「…………」

「先生、今度焼印でも入れましようか」

「はい?」

「いやだなあ、分かつていらつしゃるべせに、先生。締め切りを忘れないように肌に直接刻むんですよ」

「ひいー!」

渡部は恐ろしさのあまり奇声を上げた。

「あつ、先生。どこに焼印を入れますか? オススメはおでい……いや西田です」

「田中ちゃん!… 何言い直してるの…? し、しかも、そこはもはや肌でさえないよ!?」

渡部の言葉に田中は「ふふふ」と不気味に笑った。

「では、一週間後の首……じゃなくて、締め切り忘れないで下さいね」

「た、田中ちゃん。首つて何ツ!?」

「失礼します」

ツー、ツー、ツー。

渡部は白衣で冷や汗を拭い、携帯電話を閉じた。

「まったく、偉大な科学者をおちょくるんじゃないよ……」

渡部は一言ぼやいて、以前田中に渡されたはずの執筆に当たつての資料を探し始めた。研究室を私物化している渡部ならば、研究室に資料をしまつていてもおかしくない。

「どこにしまつたかな」

真昼の研究室には、付けっぱなしのテレビの音と、変人科学者の
独り言が響き渡っていた。

三十分程経つただろうか。渡部は再び椅子に座り、「コーヒーをす
すつていた。

「つたく。資料はどこへ行つたのかね。多分家だな……こりやあ。
いや、別荘か？」

研究室を散らかすだけ散らかして、渡部は早々に資料探しを諦め
てしまつていた。探すのが面倒になつた、という方が正しいだろう。
彼のこの怠惰に何人が気を揉んだか分からぬ。そんな例を挙げる
気になれば、枚挙に暇がないのだ。

渡部はふと電源の入つたままのテレビに目をやつた。

「……今入つたニュースです。本日午後一時四十分頃、都内のS大
学附属病院で、警察により一般人の立ち入りが禁止されたこと
です。立ち入り禁止となつた理由は発表されていないとのことです。
……」

テレビを観る渡部の手は小刻みに震えていた。

渡部は画面を凝然ぎょうぜんとして見た。渡部は一瞬、姿の見えない黙示録もくしりょく
的発見の断片を見たような感覚を覚えた。

病院の封鎖。余程のことが無ければ現代でそのようなことは大々
的に行われない。

「S大学附属……」

渡部はS大学附属病院に数少ない友人の一人が居ることに気が付
いた。S大学附属病院で何があつたのか、友人に聞けば分かるかも
しない。渡部は携帯電話を取り出した。

「コン、コン。

目的の人物をアドレス帳から引き出し、通話ボタンを押そうとし
たその時、研究室のドアが叩かれた。

「……ちつ。こんなときに誰だ。……どーぞ」

予定を邪魔されて悪態を吐きながらも、渡部は来客の入室を許可した。おもむろにドアが開かれる。

「……なつ！－！　お前かよ！－！」

「俺じゃ悪いのか？　……渡部、久しいな」

渡部の目の前には、まさに今携帯のアドレス帳から呼び出された、彼の数少ない友人の一人が立っていた。S大学附属病院の精神医学者、中森弘明なかもりひろあきである。

「今電話しようと思つてたところなんだ、タイミングいいねえ、中森い！　それとも……S大学附属病院の件のお話しつて事かな？」

渡部は不気味な笑顔を浮かべて尋ねた。

「知つてたか。さすが、話が早いな。しかし、研究もしないでテレビを観ているとはな……」

中森は皮肉たっぷりに応えた。

「別に構わんだろう。研究費出してんだから、国も俺を必要としてるんだろうさ」

渡部はいつもどおりに返した。どうやら中森の皮肉は意味を成さなかつたらしい。

「しかし渡部、いい加減やめたらどうだ？　それ」

中森は木製のテーブルを挟んだ渡部の合い向かいの椅子に腰掛け、言った。

「何のことだ？」

「……コーヒーをビーカーで飲むのはおかしいだろ」

テーブルには渡部の飲みかけのコーヒーが置かれていた。そして、容器はビーカーである。

「研究者なら、ざらにあることだろーが。気にすんな」

「お前の場合薬品を入れて、洗わずに飲んでいる可能性があるだろう」

中森が指摘すると、渡部は急に黙り込んで、何かを考え始めた。何やら不穏な空気が漂っている。

「……やべつ」

「……お、おい、マジかよ！」

「…………大丈夫、死にはせん！」

「そういう問題じゃねーよ！　だいたい渡部、何で研究所を私物化してるくせに『コーヒー・カツプ』の一つも無いんだ！？　この部屋は！」

「つむせえうるせえ。俺の部屋を俺がどうしようが俺の勝手だろーが」

「お前の部屋じゃねーだろ！！　あくまで私物化されているに過ぎん！！」

部屋に一人の怒鳴り声が響き渡った。このような言い争いも、もう見慣れた光景である。一人は大学の同級生。昔からこのような会話は変わらない。

「……で、中森。お前は俺の有意義なコーヒー・ブレークを邪魔しに来たんだっけか？」

「有意義という部分にツッコミを入れたいところだが、ひとまず流すことにして。俺が今日来たのは他でもない、お前に頼みがあつたからだ」

「S大付属病院は関わってるのか？　その話」

「ああ。あそこでとんでもない事件が起きている。人類の歴史の分岐点になりかねない大事件がな……」

「いい話じゃなさそうだなあ、そりゃあ。俺は直感的に気付いたよ。ペストやスペイン風邪みたいな、厄介な災厄が訪れるんじゃないかなってな」

渡部はほんの少し真面目さを取り戻したような表情だった。彼の言つたことは嘘ではなかつた。事実、彼は感じ取つたのだ。黙示録的な何かを……。

「なるほど、お前はあの封鎖を感染症だと予想したわけか」
中森は興味深げに言つた。

「アレは完全に『隔離』だ。そつだろ？」

「違いない。しかし、科学的には感染症じゃない」

「……冗談だろ？ 感染症以外で隔離はない」

渡部は断言した。ただでさえ隔離という措置そちは何かと問題が多い。それが感染力の強い感染病でなければ他に何が理由になるというのか？

「なあ渡部、感染はするが、ウイルスも細菌も寄生虫も関与かんよしてい
ない症状じょうつてのを見たことがあるか？」

中森は渡部の目をしっかりと見据え、訊いた。

「そんなものは存在しない。もし存在するとしたら……」

「存在するとしたら……？」

「それはお前の分野、精神医学の範疇はんとうだ」

渡部は中森を指差して、はつきりとそう言った。

研究室には深刻な表情をした一人の人物が、蛍光灯の明かりを照り返す黒いテーブルを挟んで向かい合っていた。

「今から話すことは、親友として頼みたいから話すことだ。決して科学者としてのお前に事件解明の依頼をしている訳ではない。俺は医者として、この症状から人々を守りたいだけなんだ。だが、無理なら断つてくれ。結果として、重い責任を負つてもおかしくない」とだ」

精神科医、中森弘明は肅々と語った。

それを聞き生物学者、渡部秀真は黙り込んだ。しかし数秒の後、渡部は口角を上げもう耐えられないという様な表情で笑い出した。「はははははははははははははははは！」

「て、てめえ！！ 何が可笑しいんだ！ こつちは真剣に……！」

「何だ？ 改まりやがって。大学時代から俺らは馬鹿なことから本気なことまで、協力してきただろーが。俺の性格を知つてんだけ。人類の岐路だつて？ そんな話を聞いたら協力しない訳にはいかんだろう。俺は暇だと死ぬんだ。良い話持つて来てくれたじゃねーか、中森！」

「お前、馬鹿か！ お前はこの事件を分かつちゃいないんだ！ 今回はそんなゲームみたいな話じやねえんだぞ！」

中森は研究室の外にも響くよくな声で怒鳴った。それを受けた渡部は急に真剣な顔をして言う。

「分かつてないのはてめえだ、中森。俺はゲームにもお遊びにも本気を出す。お前が俺に相談するくらいだ。とんでもない事件だつてのは分かつてる。お前の相談に応えるのに手は抜かん」

「…………」

中森はまだ沈黙した。渡部という男がここまで気張ることが滅多に無いということを中森は知っていた。

「中森、話せよ。今、S大付属病院で何が起きている？」

「S大付属病院だけじゃない。実際は全国……いや、先進国全域で、既に数え切れないほどの人々が発症しているだろう。このまま手を打たなければ、人類は滅びる」

「何だと……？ 妙な冗談はよせ。さすがに人類が滅びるなんてことは……」

「本当の話だ。今のペースだと五年はかかるない。それだけの感染力と死亡率なんだ」

中森は震える手を押さえつけるように両手の指を組ませた。

「死亡率のパーセンテージは？ それに感染経路」

「現在のところ死亡率は百パーセントだ。感染経路に関しては後で話す。その前に、これを見てくれ」

中森は胸ポケットから折り畳まれた数枚のプリントを取り出し、渡部に手渡した。

「これは？」

「俺の知り合いに桐崎という同業者がいる。この事件に気付いた最初の人物だ。彼はこの事件の概要をメールで送ってきた。そのメールをプリントアウトしたのがそれだ。現状を理解するならそいつを読むのが一番早い」

中森がそう言つやいなや、渡部は桐崎書いたメール『謎の症状に関する報告書』を丁寧に読み始めた。

渡部が口を開いたのは、三分ほど経つてからだった。

「……こいつは、ただ事じゃねえな。ホントにこんなことが起こってんのか？ 直で話がしたい。この桐崎義光つづう精神科医はまだ生きてるか？」

「……いや、残念ながら昨日、二十五日に彼は亡くなつた。もっと早くに連絡がつけば詳しい話を聞けたんだが……」

「待て、このメールは二十日に送られてきたんだろ。どうしてその時点で電話しなかった？」

「桐崎は何度も俺の家や職場に電話したようだが、俺はアメリカの

学会に出ていて連絡が届かなかつた。だからわざわざメールを送ってきたんだ。二十日に受信したメールを観ることができたのは昨日だつた。だが俺が電話した時には既に桐崎は死んでいた。数時間の差で間に合わなかつたようだ

中森は苦しげに話した。後悔は尾を引いていた。自分がもつと早くメールを見ていればと思わずにはいられないのだ。

「そうか……残念だ。ところでＳ大付属病院が封鎖されてんのはどうしてだ？」

「感染は既にかなり拡大しているんだ。さすがに謎の感染症の存在に気付くものが出でてきた。国が気付いた時には既に全国数十カ所で爆発的感染が起きていた。政府は解決策も分からず、この症状の存在を公開すれば国民の混乱を招くとして、ただ内密に感染者を隔離することしかできなかつた。その隔離場所の一つがＳ大付属病院だ。直にマスコミに見つかるだろ？が、既にＳ大付属病院の他にもいくつか封鎖された病院はある。この事は、俺を含めた一部の医学関係者や専門家にしか伝えられていない」

「なるほど。しかしよお、俺はその『一部の専門家』に入つてねえのな。俺が今までの学説を何度、覆してきただと思つてんだ。俺以上の天才がどこにいるつうんだよな」

渡部は不満げに言い放つた。確かに彼の言い分は理にかなつていた。生物学のエキスパートである渡部に事件の詳細が知らされないのは本来ありえないはずだつた。

「しようがないだろ。お前はそこら中で嫌われてんだよ。突飛な理論で話を搔き回しちまうからな。『ペルニクス的転回』のようなパラダイムが百八十度変わるような新説は、保守派の学者に嫌われるんだ。それがたとえ真実でもな。俺は今回の事件でそのことを嫌といふほど思い知られた」

中森はくたびれた表情を一瞬見せ、渡部を宥めた。^{なだ}その言葉にはどこか含みがある。

「どういう意味だ？　まるでお前が今までの学説をひっくり返すよ

うな発見をして、非難されたかのような言い方じゃないか」

「いいか、さつきも話したが、俺はお前に事件の解明を依頼しに来た訳じゃない。俺は既に解決に結びつく可能性のある一つの答にたどり着いたんだ」

「答……だと？　ここで言つ答つて何だよ。謎の感染症の原因か？」

「原因は分からぬ。だが、感染の方法ないしは条件らしきものを見つけた。それを証明し、この事件を終息させれば、原因も分かるかもしない」

「何!?　だとしたらこの事件は半分解決したようなものじゃないか！」

渡部はただ驚嘆した。感染の仕組みが判明すればある程度の処置はできる。つまり、今の停滞した状況を打破できるのだ。

「ところが、そうはいかなかつたんだよ」

中森は声を荒らげる渡部を制して、そう言った。

「俺は桐崎の死を知り、この事件の異常さを身を持つて理解した。一刻も早く止めなくては、人類が滅びかねないと思った。そこで俺は他の場所でも被害が出ていなかつたんだよ」

「俺は桐崎の死を知り、この事件の異常さを身を持つて理解した。一刻も早く止めなくては、人類が滅びかねないと思った。そこで俺は他の場所でも被害が出ていなかつたんだよ」

報道規制を命じているんだ。だから俺は国に情報を開示するよう要求した。しかし、無駄だった。対策案が挙がるまで情報は開示できないと返答されるだけだ」

「……何だそりやあ。一分一秒を争う事態だらうが！」

「ああ、だから俺は自分で解決策を見つけることにした。全国の患者のデータと、発症の経緯を取り寄せたんだ。担当医が発症しているパターンが多く、集まつた情報は少なかつた。だが、いくつかの共通した妙な発症パターンを見つけたんだ」

中森はそう話すと溜め息をつき、椅子に深く寄りかかった。

逆に渡部は身を乗り出して中森の話に関心を示した。

「妙な発症パターンか……。そいつが、感染経路の特定のヒントになつたつて訳か」

「ある家族が発症した。だが、その家族は発症するまでに誰にも会つていなかつた。……どうやつて感染したと思つ?」

「……誰にも会つていなら感染とは言わんだろ?。あるいは、その家族が謎の感染症の起源とか?」

「いや違う。その家族は親戚から感染したんだ。……テレビ電話を通してな」

「……馬鹿な! テレビ電話だと! ? そんなことがあり得るのか! ?」

ガタンッ!

渡部は大声を上げながら立ち上がつた。座つていた椅子が激しく音を立ててひつくり返る。

「担当医の記録では、その家族は親戚とテレビ電話をしていたらしい。その途中、その親戚が発症した。時が戻つていると話していた。そうだから間違いない。それを見て、後に家族がこぞつて感染したんだ。同じようにテレビ電話の相手が発症した事例がいくつかあつたが、いずれもこの場合に限つて感染が空間を越えている」

中森は力強く言い放つた。

「つ、つまり、視覚か聴覚を通して感染するといつのか……」

「いや、おそらく視覚だ。最初の発症者の高校生は大声で叫んでいたが、近隣住民は全員感染した訳ではない。それに、声を聞いて感染するなら、電話を通して被害はもつと拡大している」

「いや待て。視覚の方が感染は早いんじゃないのか? 発症者を見ただけでアウトつてことだら? それにしては駅や空港での、拡大がおとなしい…………」

「俺も同じことを考えた。そして、俺はある仮定に至つた

「仮定……?」

中森はしばらく沈黙した。

重苦しい静寂が、中森に迷わせた。中森自身、未だその仮定を完

全には信じられないのだ。

「……田だ。発症者の瞳を正常者が見ることでこの感染症は伝染する。俺がその仮定に至ったのは、患者の症状は全て目に関わるからだ。見ている風景の時間が戻っているように見え、次に自分の見てきた記憶が遡つて見える。どれも『見える』だ。他にもデータがある。全盲の人人が全く感染していないんだ。もちろん、確定的な証拠はない。だが、俺はこれが真実だと思つてる」

遂に渡部は言葉さえ忘れた。ただ驚愕と恐怖と好奇心がせめぎ合ひ、渦のように思考を搔き回す。渡部の脳内では凄まじい嵐が起つていた。

数十秒か数百秒か、その静けさがどれほど続いたのか渡部には判らなかつた。しかし、彼の脳はひとつの思考に収斂していった。

「……中森、俺は……お前の理論を支持する。……いや、信じるぜ」

渡部はニヤリと笑い、そう言つた。

その言葉で、中森の不安を消し去つた。

「……渡部……ありがとう」

「……よつしや。中森、そいつを対策本部だかWHOだかに、教えてやれ。対策案を進言するんだ。国民全員に外から瞳を見れないようなゴーグルかなんかを配給させりゃあいいんだろう?」

渡部は声を張り上げて揚々と言つた。

しかし対する中森の表情は厳しかつた。

「いや、それはできない……」

「はあ? 何故だ?」

「俺は視覚からの感染の可能性に気が付き、既に対策本部に報告した。だが、相手にされなかつたんだ。さつき言つただろう。視覚から病気は感染しないってのが常識だ。やつらから見たら俺の方がよっぽど病気にえたんだろう」

中森は自嘲氣味な薄ら笑いを浮かべ、諦念の混じつた目を渡部に向けた。

「ちょっと待て、だつたら打つ手無しか？ マスコミは報道規制があるし対策本部は聞く耳を持たない。お前、どうするつもりなんだ？」

渡部は倒れた椅子を起こし、どっしりと座り、深く息を吐いた。

その様子を見て、中森は逆に質問を返した。

「なあ渡部、お前確かに、花沢総理と仲良かつたよな？」

中森は口角を僅かに上げる。

渡部は中森の意図を瞬時に理解した。

「……まさか、俺に花沢総理を動かさせて訳か？」

中森の頼みとは、まさに総理を動かすことだったのだ。

「渡部、総理はお前に大恩があるそうじやないか。お前ならできなくもないんじやないか？」

「……ハハハハハツ！！なるほど……な。考えたじやねーか、中森！ そう慎重になるな。頼まれなくともやってやる。……任せろ、上を脅すのは大得意だ。それがイヤだから連中は俺を避けてんだろう」

「うふ」

「……フツ。お前が親友で良かった。……決まりだ！ 渡部、花沢総理に記者会見を開かせるんだ。情報と対策方法を国民に対して発表させる。民放もラジオもネットも、全部使つんだ。対策本部がダメならさらに上に掛け合つまでだ！」

研究室に中森の言葉が響き渡った。

そしてこの二人の働きが、人類の歴史を大きく動かすことになる。

EPISODE? - Revolution (後書き)

いいまでもが、問題編といつか、前編といつか、謎の解明の準備が整つた感じです。

次回から物語は完結に向かっていきます。

前触れもなく蔓延した謎の感染症は、花沢昭一内閣総理大臣の対策記者会見から約二ヶ月を経て、完全に終息した。

現在、謎の感染症は「リワインド症候群」という俗称で呼ばれている。原因となるウイルスや菌、物質は発見されず、正式な名称の決定や分類は後回しになった。

感染拡大の抑止には、三人の人物が大きく関わった。

精神医学の権威、中森弘明。彼は早い段階でリワインド症候群の感染経路を特定し、多くの人を救つた。

生物学者、渡部秀真。彼は内閣総理大臣にリワインド症候群対策記者会見を開くよう助言し、その後もメディアを通して国民に注意を呼び掛けた。

そして、精神科医、桐崎義光。彼はリワインド症候群の犠牲者が、早い段階で人類と国家の存亡の危機を訴え、事態収拾の指針を示したとして賞賛を浴びた。

対策記者会見では、主に感染予防の方法が詳しく発表された。外から見て瞳を認識できないようなゴーグルが配布され、配布がされるまでは目隠しになるものの着用や外出禁止などの義務化をもつて対応し、最後の発症者の死亡をもつてゴーグルの装着の義務は解除された。

視覚を通しての伝染という常識外れの発表は当初、専門家や評論家から揶揄^{やゆ}、否定され、世界的にみると過半数の人間がそれを信じなかつた。しかし、下らないと主張していた者が次々と死亡したことがマスコミによって報じられると、次第に信じないものはいなくなつた。

終息までの間、大きな問題が起きなかつた訳ではなかつた。地球は瞬く間に混乱の地へと変わり、リワインド症候群の蔓延に伴つた犯罪も増加していった。更に、経済が停滞し急激な不況期に陥り、

人類の生活の一部は一世紀前に戻ったかのような状態になった。そして何より、死亡率が百パーセントであるということが、人類に深い恐怖と混沌をもたらした。

また、沈静化が成功して数週間は早期解決を賛美する声が世界中を盛り上げていたが、あくまでもそれは、人類の危機を共に乗り切つたという一種の精神的統一感があるからだ。実際には被害者も多く、対応には杜撰ずさんさがあった。

時が経ち、この事件が再びクローズアップされるとき、政府への非難や、人類全体の喪失感は増すことだろう。

今回の事件後、先進国的人口は事件前の三分の一未満になつたと言われている。特に日本の被害者は多く、次いでアメリカ、イギリス、フランス、そして中国を始めとした新興国もかなりの被害を受けた。後進国の被害も含めれば、その被害者総数は想像をはるかに超えるものだ。

人類が失つたものは、多すぎたのかもしれない。

しかし、地球規模の大きな視野をもつて世界を眺めると、失つたものばかりではないということが明らかになつた。

これは、リワインド症候群が鎮静して半年が経つた頃によく公表されたことではあるが、リワインド症候群が人類に猛威を振るつていたのとほぼ同時に、もう一つの驚くべき現象が起つっていたのだ。

「リバイバル現象」

これもまた俗称ではあるが、多くの人はこの現象をそう呼んでいる。

リバイバル。つまり、「復活」「再興」である。

絶滅種あるいは絶滅危惧種と呼ばれる動物たちがいる。ドードー や二ホンオオカミなどがその類だ。

現在では見ることができないとされ、既に滅びたはずの動物たち

が、現在、世界中で多数発見されている。

世界で最初に発見されたのは二ホンオオカミだった。発見された日は丁度、精神科医の桐崎義光が死亡した日だ。

翌日には報道もされたが、その数時間後にはS大付属病院の封鎖報道、続いて花沢総理の記者会見、とメディアはリワインド症候群の話題で隙間なく埋まってしまった。

故に、二ホンオオカミの再発見という、ある意味歴史を変える大事件が起こっていたのにも関わらず、大々的にそれが知られることはなかつた。

世界が落ち着きを取り戻した頃、科学者たちはようやく地球で異常現象が起きていることに気が付いた。

絶滅種あるいは絶滅危惧種に指定された動物の発見は次々となされ、留まることを知らなかつた。それどころか、その勢いはリワインド症候群の鎮静と対照的に大きくなり続けた。

最初の二ホンオオカミの発見から、半年で、発見、再発見された哺乳類や鳥類は百二十種を超えた。その後有名な絶滅種、絶滅危惧種はほとんど発見された。

日本ではイリオモテヤマネコ、シマフクロウ、トキ、キタタキなどが複数体見つかり、世界ではエピオルニス、モア、リヨコウバト、ドードー、オーロックス、クアッガ、ケープライオン、バーバリー、ライオンなど、絶滅種、絶滅危惧種として有名な種が多いとも簡単に見つかつた。

後の調査報告によると、見つかつた絶滅種や絶滅危惧種は自力でその種を繁栄できるレベルの数が発生し、それぞれの種の個体数は生き残るために最適な、過不足ない数であるという。

しかし、どれだけ調査をしても分からなかつたのが、発生の経緯であつた。発見された絶滅種や絶滅危惧種はどこからやつてきたのか？

その発生経路だけは、いつになつても判明しなかつた。

現在、世界の話題はある噂で溢れかえつていい。

「リワインド症候群」と「リバイバル現象」。その両者は同時に起きた。この二つの不可解な事件は、関連性があるのでないか。そんな噂がどこからともなく広まつた。

現在でも発見され続けている絶滅種や絶滅危惧種の個体総数は、奇しくもリワインド症候群によつて亡くなつた人間の総数に極めて近くなつてきている。

もちろん、新たに発生した絶滅種や絶滅危惧種の総数は正確にカウントできるものではない。しかし、生物学の権威である渡部秀真による発表では、現在の科学技術をフルに活用すれば、大まかな予測数値は出せるという。そしてその数値がリワインド症候群の犠牲者の総数と合致する可能性は大いにあるそうだ。

最近では、直接間接に関わらず、人類の発展によつて存亡の危機に陥つた動物ばかりが復活していると主張する者も現れた。

リワインド症候群の蔓延は、「人間から動物たちへの償いである」とか、「あるいは「動物たちから人間への復讐である」」とか、そのような人智を超えた噂が、人々の中で信頼に値する真実であるとさえ思われ始めている。

もちろん、それを下らないと主張する者はやはり多数存在する。だが、リワインド症候群が視覚を介した感染をするということが眞実として浸透した今、この世界はかつて「非現実」「非科学」と呼ばれたものが、根拠さえあれば受け入れられる世界に変わつていた。不思議なことに、科学者がそんな噂を否定するのも虚しく、噂が現実として受容されるための根拠が次々に明らかになつていった。

そして、人類に審判が下され、不条理によつて消えていった動物たちが蘇つたという噂はもはや「事実」にならうとしている。

それが本当に事実であるかは誰にも分からぬ。しかし、まるで世界に意志があるかの如く、どこか名も知れぬ場所を目指すように、この世界は変化を続けている。

リワインド症候群の蔓延から、まもなく一年が経とつとしていた。書店出版社に勤める編集人、田中涼子はリワインド症候群と深く関わりのある場所に来ていた。

精神科医の桐崎義光が最初に診察したリワインド症候群発症者の高校生が住んでいた住宅団地だ。

彼女がそこを訪れたのは、取材の為だった。

三年近く前、田中はある人物に書籍の執筆依頼をした。今では個人的に親交もある、生物学の権威、渡部秀真だ。リワインド症候群の終息に関わった人物としても有名である。

もちろんその頃はまだリワインド症候群は身を潜めていて、出版予定の書籍の内容もそれとは関係ないものだった。しかし今回、世界中の人に「あの惨劇」の真実を知つてもらつ必要があるという、渡部の意向によって、書籍の内容はリワインド症候群についてのものに変更された。

そして、その書籍の編集と取材を担当しているのが田中である。彼女は日頃、編集を生業としているのであって、取材や執筆は彼女の仕事の範疇ではないのだが、奇しくも変人であると言われる渡部と長期に渡つてコミュニケーションを取れる人員は田中しかおらず、彼女が執筆に必要な情報の収集と伝達をすることとなつた。

しかし、実際はそれだけではない。渡部は取材をした者と編集人、そして執筆者が同一人物であるのが一番だと言つた。小さな情報の誤解が、出版される書籍を読んだ人に思わぬ影響を及ぼす可能性があるそうだ。……つまり、渡部はその本にそれだけのメッセージを込めるつもりなのだ。「この本は現代の聖書になる」、渡部は田中にそう話した。誤った情報の伝達を防ぐため、渡部は田中を選んだ。彼女はそれだけ信頼されていたのだ。

そもそも、渡部秀真が直接取材できなかつたのには理由があつた。彼は現在、キリスト教カトリック教会の総本山であるヴァチカンに出向いているのだ。カトリック教会では、秘密会議が開かれ、その会議は既に開会から二十日が経過している。

意外にも、リワインド症候群が最も大きな影響を及ぼしたのはキリスト教の宗教観へのものだつた。正確にはリワインド症候群とリバイバル現象の影響である。

世界中の宗教観が今、大きく変わり始めていた。

リワインド症候群とリバイバル現象の関連性はもはや「事実」に昇華していた。それが眞実であるか否かは定かではない。しかし人々の中では、それは「眞実」として確立していた。

各メディアは、連日その「噂」を人々に伝え続けた。

リワインド症候群とリバイバル現象は繋がつてゐるという「噂」を。

リワインド症候群の蔓延で人間は多大なダメージを受け、同時に人類によって死に追いやられた動物たちがリバイバル現象で再興した。そして、犠牲になつた人類と再興した動物の予想総数はほぼ一致した。

それは、まるで人類が死という天罰を受け、その命が転生して動物たちが復活したかのような、そんな構図を世界に発信していた。

キリスト教の聖典の一つ、旧約聖書には人間と動物の上下関係がはつきりと記されている。神は己の姿を模して人を造つた。そして、その人間に地上の動物を支配する権利を与えた。植え、栄え、海の魚、空の鳥、地上の生物をすべて支配せよと言つた。

旧約聖書創世記に記されたその記述は、人類繁栄の全てだつた。

しかし、絶対の真理だつた聖書は、その正当性が疑われ始めていふ。人類が地球の絶対の支配者であつた時代は音を立てて崩れ落ち、動物たちの持つ生きる権利が重視され始めた。

動物たちを軽んじ、滅亡に追いやつた人類がさも罰のような仕打ちを受ける。それは、聖書の、神の、そしてキリスト教の「權威」

を地に落とす出来事だった。

それは、ある意味では、当然のことなのかもしれない。そう思う人々は増えてきている。本来、「権威」などを持つてはいけないのが、聖書に記された理念だからだ。「綺麗事」と呼ばれた理念が、正しく実現したとさえ言つ者もいる。

人類が死に、代わりに動物が蘇つたという考え方が、世界中に広まつた今、旧約聖書を聖典とする宗教は信頼を失いつつある。

代わつて台頭したのが仏教だ。人も動物も、等しい命を持つているという考え方は、世界三大宗教の中で、仏教の信頼を強めた。

そんな宗教観の変遷が、カトリック教会に焦燥感を与えている。

渡部秀真は、リワインド症候群の残した謎の解明には、リバイバル現象の調査も必要だと考えた。そしていち早く、二つの現象の関連性を調べ始めていた。

世界の宗教の行く末を左右するのは、渡部の発する情報なのだ。最も真実に近いのは、実質渡部ただ一人であつて、彼がカトリック教会の秘密会議において、キリスト教の未来についてどんな意見を呈示するかが、世界の信じる道を決める。

故に帰国後、彼の書く新たな『聖書』は、編集人である田中涼子にとても興味深いものだった。

田中はその手助けをすべく、事件の起源を探りうつとしていた。

EPISODE? - Sacred book (後書き)

「iji-kariba, EPISODE? - Biologyで登場した田中涼子の視点で物語は進みます。

その住宅団地は、酷く廃れた^{すた}イメージを漂わせていた。まだ昼間で、太陽光も住宅の隙間から多分に差し込んでいたが、人は少なく、まるで廃墟のようだつた。もつとも、多くは実際に廃墟と化してしまっているだろう。この団地では一年前にリワインド症候群の惨劇があつたはずだからだ。人が少ないのも、そのせいかもしれない。

田中涼子は大通りから団地内に入ったときから、背筋に僅かな寒気を感じていた。まるでそこに、凶悪な怪物が潜んでいるかのよう、見えない影が住宅団地を覆つっていた。

彼女は団地の近くまではタクシーで来たのだが、そこからは自分の足で目的地まで出向くことにしていた。ピリピリとした異形なムードが、肌を直接撫でる。

……きっと、何がある。

田中は心の内で確信していた。

しばらく歩くと、目的の家が見えてきた。記録上最初の発症者である高校生、徳永悟^{とくながさとる}の住居だ。

徳永家は今、遠縁の親戚によつて管理されている。しかし実際のところ、その家の鍵を持っているというだけで、管理はなされていない。親戚だという彼らも、リワインド症候群の発症者が出て家には来たくないようだ。

徳永家の調査は、比較的スムーズに許可が出た。被害者徳永悟の肉親はみな、リワインド症候群で死亡してしまい、管理権が委託された親戚も、徳永家にほとんど関心を持つていなかつた。親戚間の関係は希薄で、どうも良好というわけではなかつたようだ。

田中は、徳永家の前までやつて來た。すると、住宅団地を覆つていた影の正体が解つたような心地がした。

それは死だ。死の冷たさ。死の寂寥觀^{せきりょうかん}。この場所には死が浸透している。

……そうか、沢山の人が死んでしまったんだ。

死に困まれた人々、そしてそれに包まれて実感する生の感覚。彼女は自分が生きてここに居るということを再認識した。

家中に入ると、埃の臭いが僅かに鼻孔を刺激した。玄関にはすり硝子の窓がある。そこから太陽光が差し、玄関は比較的明るい。舞い上がる埃の粒子が細やかに輝いていた。

玄関からは西に向かつて廊下が続き奥の方で左に曲がっている。南にはキッチンがあり、キッチンの西にはリビングがあり、部屋の奥が先ほどの廊下と繋がっている。一階の全ての部屋を確認すると、徳永悟が日頃使用していた部屋は一階にありそつだという結論に至つた。階段は玄関に繋がっている。

ギシリと階段の軋む音を聞きながら一階に上ると、そこには四つの部屋があった。寝室、ウォークインクローゼット、トイレ、そして徳永悟の部屋。田中は徳永悟の部屋をすぐに認識できた。ドアに「SATORU」と書かれた札が下がっていたのだ。

ドアを開けると、徳永悟の部屋は六畳程の部屋だった。学習机と椅子、そして巨大な本棚。彼の部屋は主にそれらで構成されていた。入口近くに置かれていたのは本棚だ。

本棚には太宰治や芥川竜之介、坂口安吾、梶井基次郎の小説が整頓して並べられている。田中は何となくその内の一冊、『梶井基次郎全集』を手に取つた。すると、相当読み込んであったのか、短編『檸檬』のページが自然と開かれた。

……青年の悩みを描いた作品『檸檬』。徳永悟もまた、そのような悩みを抱えていたのだろうか。

田中はそんなことを思いながら、本を閉じて棚に戻した。

一年間使用されていないということを除けば、部屋は比較的綺麗だった。薄く積もった埃を払えば、すぐにでも使えるようになるだろ。

しかし、田中には今更掃除をする気もなく、埃の少ない場所から調べることにした。

最初に目に付いたのは学習机の引き出しだった。

引き出しを開けてみると、B5判程度のサイズで白い革のカバーが付いたノートが一冊だけしまわっていた。表紙には黒い文字でこう書かれている。

「**蒼天真理会**」

田中はそれが何なのか知つていた。蒼天真理会は新興宗教団体である。リワインド症候群が世に知れる直前、月に一度の定例講演会の直後、教祖が失踪して一騒動あつた団体だ。彼女の知る限りでは、蒼天真理会の信者は、誰一人教祖の失踪に慌てなかつたらしい。まるで、失踪することが分かつていたかのように。

ノートの表紙をめくると、会員証のようなカードが挟まれていた。

会員番号 2010 番

氏名 徳永悟
年齢 17歳

どうやら、徳永悟は蒼天真理会の会員、つまり信者であったようだ。

革のノートは、信者皆に配布されるものようだ。

パラパラとページが捲れる音を立てながら、ノートを中を覗き見していくと、六十ページ程ありそうなノートの三分の一近くまで文字が書かれていた。内容は、ある種の日記だった。蒼天真理会は月に一度、教祖による講演会を開く。ノートにはその講演会の様子が記録されていた。

田中はノートに書かれた最後の日記を読むことにした。教祖が失踪する直前、そして徳永悟がリワインド症候群を発症する直前の講演会の様子が書かれた日記だ。何か重要なことが書かれているかもしれない。

田中は『第一〇八回講演会』と題の振られたページを開いた。

第一〇八回講演会

今回の講演会では、教祖様は終始、興奮なさつていた。毎回、世界の眞の道理を、美しき御言葉で僕ら信者に説いて下さつていたのだが、今回はいつもの雰囲気と違つていた。何か、いつも以上に神々しく、言葉の一つひとつが直接的だったのだ。

教祖様は常々仰つていた。この世には絶対の平和は無いのであると。何故ならば、この世に生ける全ての生命にとつて平和は同一の定義で捉えられないからだ。

戦争は倫理的に悪であるとされている。しかし生命の重さが等しいならば、必ずしもそうは言えないそうだ。教祖様はこう仰つていた。

「戦争で失われた命がある。しかし、戦争をしなかつたために失われた命もある。前者は多数派で後者は少数派であるが、その命の重みは等しく尊い」

平和とは何だろう。命の重さとは何だろう。教祖様は今回、その答を授けると仰つた。しかし、何故かその場では答は教えて頂けなかつた。

不思議なことに、僕らのような一般人でも、近いうちに身を持つてその答を悟ることになるそうだ。

教祖様はこう仰つた。「今回の集会に出席し私の瞳を見た者には、既にその権利が私から『えられ、後に君たちがその権利を更に全世界に発信するのだ」と。

僕は教祖様に尋ねた。答を知るとは具体的にどのようなことなのですか、と。教祖様は空を見ながら、厳かに以下のよ的な主旨の御言葉を仰せになつた。

「強いて言つならば、それは第一の誕生だ。自分の歴史を遡り、か

つて生まれ落ちたその瞬間を目にする時、君たちは生れ変わる。私もまだ歴史を遡っている途中なのだ。だが、神は私に確かに言った。

私が生命の再興の起因になるのだ、と

なんと、教祖様は神の御言葉を直接聴いたと仰るのだ。教祖様は最後にこう付け加えた。

「神に選ばれる予兆は、時の逆行だ。君たちも神に選ばれるることを願っている」

教祖様はその言葉を最後に、会場を去ってしまった。そして今回の講演会は閉会した。

僕のような人間でも、教祖様が仰ったように神に選ばれることがあるのだろうか。

教祖様の御言葉の内容があまりに神秘的だったからか、今日はやけに瞳の奥が熱く、胸が高鳴っている。どうしても、神に選ばれることを期待せずにいられない。

徳永悟の勉強机の前で、田中は絶句していた。その手には革のノートが握られている。

徳永悟が残した最後の日記の内容は、あまりに衝撃的だった。彼の書いたことが事実ならば、リワインド症候群の最初の発症者は徳永悟ではなく、蒼天真理会の教祖ということになる。

日記に書かれた教祖の言葉はそのほとんどが抽象的表現で、一見すると意味不明な内容に思える。しかし、リワインド症候群とリバイバル現象に関する程度の知識を持つた人間が見れば、話は変わってくる。

教祖の言葉は、明らかにリワインド症候群とリバイバル現象によつて変わり行く未来を指し示している。

教祖は「人間」と「動物」という言葉こそ直接的に使っていないが、明らかに生命の平等性を述べている。そして、二つの現象に関するキーワードを使っている。「歴史を遡る」「生命の再興」「時

の逆行「などだ。

そして特に存在感のある言葉なのは「第一の誕生」と「生れ変わる」という表現である。自分の歴史を遡るならば、最後に辿り着くのは自らの誕生の瞬間である。そして、その「第一」の誕生は新たな生命として地球に蘇る。教祖は世界に広まっている噂のように、リワインド症候群とリバーバル現象を関連付けて捉えているのだ。田中は教祖の予言的な発言に悪寒を感じていた。直接彼の言葉を聞いた訳ではないというのに、心の奥底から恐怖に近い感情が湧き出てくる。

蒼天真理会の教祖は明らかに人智を超えた能力を使っている。彼が常時そのカリスマを持つていたのか、日記に書かれた会議の時にだけ「神の賜物たまもの」と呼ばれるような力を得ていたに過ぎないのかは、彼女には判断できなかつた。

……それにしても、妙だ。

田中は違和感を感じていた。彼女が畏怖するに至つた根本的な理由は、蒼天真理会の教祖が、絶対に知り得ず、それどころか予想することすら出来ないであろう事を事件の発覚前に知つていたからである。

『教祖様はこう仰つた。「今回の集会に出席し私の瞳を見た者には、既にその権利が私から『えられ、後に君たちがその権利を更に全世界に発信するのだ』と。』

この記述はリワインド症候群が視覚を通じて人から人に伝染することを、教祖が既に知っていたことを示している。

しかし、記録上最初に発症して病院に送られたのは徳永悟であり、その日は講演会が開かれた日よりも後なのだ。仮に徳永悟よりも早く発症した者が居て、その者と教祖が会つたとしても、その時点でリワインド症候群が視覚を介して感染するものだと気付くことはまずあり得ない。

……教祖は、何故リワインド症候群の性質を知っていたのだろう。そして、謎はもう一つ存在した。おそらく、教祖はリワインド症候群の最初の発症者であろう。ならば、教祖自身は一体どこからリワインド症候群を受容したのか。

「……あつ

田中は、教祖が言った発言のある部分を思い出し、再び徳永悟の記録を見た。

……あつた。この記述だ。

『神は私に確かに言った。私が生命の再興の起因になるのだ、と』

……そうだ。そもそも、彼は自らが起因であると言っていたではないか。つまり、リワインド症候群の起源は教祖自身だというのだ。そして、教祖は蒼天真理会の講演会に集まつた信者に、リワインド症候群の症状を伝染させた。

田中は、蒼天真理会の講演会に何人の人間が集まるのか知らない。しかし、全国から数百もの信者が集まることは容易に予想が付く。全国から集まつた信者は、リワインド症候群の症状を受け取り、それぞれの住まう地方に帰つて行く。そこからあの悲惨な事件が幕を開けたのだ。

だが、そこには教祖の陰謀があつたという訳ではなさそうである。

教祖はその言葉の端々に「神」という単語を使つてゐる。

まるで、リワインド症候群の種と、その性質の知識を、神から授かつたとでも言つよう。に。

「まさか……神の仕業だとでも言つの……？」

気付くと、彼女は疑問を口に出していた。その声は部屋の中で微かに反響し、やがて行き場を失い消えていった。

田中は徳永悟のノートを持って部屋を出た。もう、この部屋には何も無いように思えた。それに、この土地から伝わる瘴氣のような邪気が濃くなつたかのような気がしてならなかつたのだ。

早くこの家を出たい、と田中は切願していた。

しかし階段の傍の窓からの光景を見て、田中は立ち止まってしまった。

「……な……に、これ……」

窓の外では、大量の鳥かわいすが空中を舞っていた。団地に張り巡らせられた電線にも隙間なく鳥が止まっている。しかも、全ての鳥が彼女の方を向いていたのだ。

田中は思わず身震いした。視界いっぱいに存在する漆黒の鳥がこちらを見ている。

鳥たちは皆、同じ目をしていた。人間を嘲笑うような瞳。人間を怨むような瞳。人間に呆れるような瞳。

そして、彼等の目は呪いの言葉を、田中の脳内に投げかけてきた。

”ニンゲンハ、ココカラデテイケ！”

彼女の脳内にその言葉が響き渡ると、鳥たちは激しい羽音を立て一斉に飛び立つた。数百もの鳥たちが渦を巻くようにして天に翔かけていく。それは黒く染められた竜巻のようだった。

田中は、鳥が消えてからもしばらくの間、立ちすくんでいた。

”ニンゲンハ、ココカラデテイケ！”

鳥たちの声、否、動物たちの人間への叫びが未だ頭から離れなかつた。彼らの言う「ココ」とは、いつたいどこなのだろう。田中には、その指示語が「徳永家」を意味するのか、「団地」を意味するのか、あるいは「地球」を意味するのか、判断できなかつた。ただその言葉は妙にリアルに脳内で再生され、闇に満ちたオラクルを得た心地がした。

早くその場を離れたいという気持ちと裏腹に、田中がようやく気

を落ち着かせ徳永家を出たのは、三十分程後のことだった。

帰りのタクシーの中で、田中は蒼天真理会の教祖が言ったという言葉を再度考えていた。

『神は私に確かに言った』

仮に、神と呼ばれる超自然的な存在が、二つの現象 リワインド症候群とリバイバル現象の背後にあるならば、地球で引き起こされた全ての事象はどう再考できるのか。

もしも神がいるならば、神は何故、リワインド症候群を地球に広めたのだろう。

田中は神の目線で地球と人類を見つめ直した。自分が地球の管理者だつたら、人類をどう見るだろう。

……独裁者。

彼女の脳内に浮かんだ言葉は「独裁」だった。人類は自らの繁栄と安泰と娛樂のために他の種を脅かしている。

しかし、リワインド症候群とリバイバル現象によつて変わりつつある宗教觀は、「人の為の神」を「全生命の為の神」に転換しようとしている。

……どうか、人類は地球から排除されるべきだと審判されたんだ。ようやく、田中は気付いた。リワインド症候群は人類を抹殺するために発生したのだ、と。そして、蒼天真理会の教祖はそれを広める役目を受けた。

……だけど、だつたら何故、人類は生き残ったのだろう。

田中は思考した。人類があの受難を乗り越えられたことの意味を。

「…………最後のチャンス…………か」

タクシーの中、運転手に聞こえないような小さな声でそう呟いた。

……人類は己を律するチャンスをもらつたのね。

田中は結論に至つた。

人類は今まで、自分の傲慢^{じょうまん}に気付かなかつた。しかしリワインド症候群とリバイバル現象が広まり、認知されることで、人々は人類がどれだけエゴイスティックであつたかということに関心を持ち始めている。

人類が生き残つたのは、尊い被害をもつてして、罪を認めるためだ。そして、その罪を再び繰り返さないように意識を改革するチャンスを与えるためだ。

田中は特定の宗教を信じているわけではなかつた。しかし、今回の一連の事件には、人智を超えた力が働いている気がしてならない。これからも、人類は歴史を刻んでいく。この先もしも、再び人類が自分本位に地球を支配するようなことがあつたら、次元を超えた管理者は、人類にどのような審判を下すだろう。そのときは、今度こそ人類は滅んでしまうのだろうか。滅ぼされ、この星に真の「平和」が訪れるのだろうか。

そんな考えを巡らしていると、窓から車内に差し込む太陽の光が、天から地球を監視する視線のようにも思えた。

人類は共存する力を築かなくてはいけない。人が消えなくとも、「平和」である地球を創らなくてはならない。

田中はその為にも、渡部秀真と協力して、現代の『聖書』を完成させることを決意した。それが人類の未来に繋がると信じて。

人類が、その目に未来を映すことができると、信じて。

あの事件から一年が経ち、私はあの事件の真相を以下のように捉えている。

我々人類が「目」を得たのはいつ頃なのだろうか。そもそも、生物が目を得たのは、何の為だったのか。

それはおそらく生き残る為つまり、外敵から逃れ、より良いエネルギーを早く、大量に、効率良く取得、確保する為だろう。それが、機能的な側面から見た一つの必然なのだ。

しかし、人類にとっての「目」は、そのような必然性から大きく逸脱してしまったのかもしれない。

人は見るために目を得たのか、目を得たから見ることが出来たのか。生物は見るために目を得た。だが、人類はおそらく違った。目を持つて誕生したヒトは、ヒトから人に成るに従つて「目」の存在を応用し始めたのだ。

それは、言うならば神への冒涜^{ぼうとく}。自然と道理を超てしまふと欲した者の思考だつた。

キリスト教で言われる「神」はこう言つた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

ないのである。

神は人の為の「神」ではなかつたのだ。自然、地球、宇宙……
そのような大きな「道理」の為の神なのだ。
この事件は、その明証だ。

人の見る現実は、自然ではない。人の見る未来は自然ではない。
それらは、人の見る過去が酷く歪んだ「不自然」である故に存在する人類の誤りなのだ。

神はそんな人間に、真実を見せた。純粹な過去を見せた。我々人類は盲目を通して正しい何かを見つめることが出来た。

人は生まれる前から歴史という名の罪を背負う。罪を背負うその瞬間 誕生の時 を自ら見つめる目を与えた。

そして、第一の誕生をもつて人は死に、その手で、その目で奪つていった存在達が不条理で不自然な滅亡の炎から蘇る。

人は不条理を呼ぶ悪魔の目を持つてしまつた。だからその命を償つゝに捧げ、消えていつた種を呼び戻す責務を負つた。

もう一度記す。もしも神という存在がいるならば、それは人の為にある訳ではない。世界、地球、宇宙……、それらの為にあるのだろう。

我々人類のような「大きく」て、そして「偉大」で、実は下らなく愚かな生物界の墮者は、その広い世界の一種族に過ぎない。愚かな人間はその事実を認めなくてはいけない。

そのために、人類は今、生き残つたのだ。

人は今、学ぼうとしている。その目が見るものを正しいものに変えるために。

人を自然の道へと、シフトする為に。

著 渡部秀真 『Shift』より

エピローグです。

プロローグの聖書の一節と対比させています。

なお、エピローグは登場人物のひとり、渡部秀真の書いた本の一節という形を取っていますので、ここで渡部が述べた説は物語の中での彼個人の一説ともいえます。

解説と後書きを次の話として用意したので、最後までお付き合いいただければと思います。

あとがき

最後まで『シフト』・真理を映す日・『読んでいただいた方々に深く感謝いたします。

どうも、作者のrakueです。

ここでは、後書きとしてこの作品の解説をしたいと思います。

解説をして内容を深めるのは半ば反則くせに感じはしますが、どうかお見逃しくださいw

まず、私がこの小説を書いたり決めたのは今年（2010年）の初めくらいです。

私はその時、期末テストのテスト勉強が間に合わず、間違いなく赤点を量産する運命にありました（笑）

そして何を血迷つたか、テストを諦めてネタメールを作つて私の長編小説執筆の相方である竜司に送信しました。

そのネタメールの内容は、私の叶わない願望をそのまま表現した掌編小説でした。

その願望とはもちろんテスト勉強の時間が間に合ひことですwつまり・・・その時にネタのつもりで書いたのがこの小説のH.Pソード1の原型だったんですね。

そんなおふざけ的な感じで始めた小説でしたが、私にとっては短編『想影（面影リグレット）』に次ぐ単独制作2作目であり、連載としては初の単独制作で、今となつては割と大事な作品になりました。というのも、かなり難産だったのでw

プロットは一瞬で最後まで思い付いたのですが、そこに大分新しい内容を付け加えていつたので、情報量が膨大化し、とても執筆の難しい作品になりました。

私は、上に書いた相方と共に長編小説を書いていますが、その連載が忙しくなり、『シフト - 真理を映す目 -』の制作はしばらくの間延期していました。そして制作を再開したときに、新たに様々なメッセージをこの作品の中に加えていきました。

人間への天罰、優位性の転換

生命の平等

孤独な子供と大人

造られた常識を鵜呑みにする世の中

メディアによる良くも悪くも強い影響力

キリスト教の持つべきでない権威

これらのテーマを、メインテーマである『人間のあり方』を軸に展開したのが『シフト - 真理を映す日 -』です。

最初、この作品は「ホラー」にするつもりでした。
しかし、多くのテーマを盛り込んでいく中で、「SF」に変えました。

正確にはそのどちらも違つよつた気がします。

私はこの作品を、メッセージ性が強すぎる作品だと思つてます。
それは良いといひでも、悪いといひでもあると思います。

けれど、その方向性で作つていつたことに後悔はないです。
そういう作品への工夫が、今後の糧になるだらうということは間違ひないので。

ところで、実は、サブタイトルもまた、工夫をしています。

意味が複数含めることを意識し、HPソード全体を一言で的確に表せるようにしました。

私の意図した訳は以下の通りです。

EPISODE? - Rapture 狂喜（異常なほど）の喜び）

EPISODE? - Panic 恐慌（恐れ驚く）

EPISODE? - Infection 感染（謎の症状の感染、桐崎から中森への情報の伝達）

EPISODE? - Biology 生物学（生物学者、二ホンオオカミの発見）

EPISODE? - Revolution 革命、転回（直接総理を動かしたこと、前衛的理論で常識を覆す様）

MONOLOGUE - The gospel 贖罪による救い、動物視点での福音

EPISODE? - Sacred book 聖典（聖書、Shift）

EPISODE? - Origin 起源（事件の起源）

EPISODE? - God 神、管理者

EPHLOGUE - The Shift 变化、変遷

しかし・・・じつ見ると、いろんな内容を書いたな、と思っていますね。

「ここまで雰囲気の違うエピソードを繋げられたのは、やはり主人公を特定しなかつたからかもしれませんね。

私的には、この物語に主人公はいません。

どれか選べといわれたら、重要度から判断するに、渡部秀真が田中涼子になりますかね。

製作中、私が一番気に入っていたのは中森弘明ですが、

田中さんも気に入つてはいましたが、EPISODE?、?、?で誰とも会話がなかつたので、性格が分かりづらかったかもしれませんね。感情移入ができなかつた感じはします。

ただ、作者である私と、価値観や見る景色が一番近いのは田中涼子で間違いないです。

彼女には最後の大役を担つてもらいましたら、当然ではありますが。

ちなみに、作品の内容について、少々語らせてもらいますと、
EPISODE? - Biology の冒頭で、二ホンオオカミの発見の報道に渡部が驚くシーンがありますが、気づいていただけたとは思いますが、MONOLOGUE - The gospel
e 1 に繋がっています。

そして、作中でほのめかされている、リワインド症候群の死者が転生して新しく発見された絶滅動物になつているという説ですが、それが一応作中での解答になるわけです。

「一応」というのは、渡部秀真の書いた現代の聖書『Shift』のなかでリワインド症候群の死者が転生して新しく発見された絶滅動物になつてているという説が書かれているだけで、あくまで証拠はないということになつてるので、完全にそれが真実と言えないかもしれませんからです。

だから、その説を確定させるのが嫌だつたので作中では明かさなかつたのですが、それに關して私の個人的な裏設定があります。

先程書いた EPISODE? - Biology の二ホンオオカミは、EPISODE? - Origin と EPISODE? - God で出てきた、蒼天真理会の教主の生まれ変わりです。

つまり、教祖が最初の発症者なので転生するのも一番早く、渡部が見た報道で見つかった二ホンオオカミが教祖ということになります。

二ホンオオカミにしたのにも、一応意味があつて、

『オオカミ = 狼 = 大神』という、繋がりがあつて、何気なく「神」の存在を示唆しているんです。

それに関して、ウイキペディアからの引用です

『日本では関東・中部地方において秩父の三峯神社や奥多摩の武藏御嶽神社でオオカミを眷属として祀つており、山間部を中心とした狼信仰が存在する。オオカミを「大神」と当て字で表記していた地域も多く、アイヌではエゾオオカミを「狩りをする神」ホロケウ「吠える神」カムイ「オオセカムイなどと呼んでいた。』

「狼」が地方によつて「大神」と当てられていたということを、絶滅動物の詳細情報を取材中に知つて、これは使わない手はないだろう、と思ってこの設定を採用しました。

そして、ここで「大神」繋がりで、「神」についての歴史と文化も調べる機会を得ました。

旧約聖書の一部を斜め読みさせてもらつたんですが（神聖な文書を斜め読みして申し訳無いのですが）、やはりこういふ思つところはありましたね。

この小説では、以下の聖書の一節が重大な鍵になつていきました。

神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

私はこの考え方は、結構好きで、生き物の命をもらって生きている人間の有り様を綺麗事抜きに正確に表しているとも言えなくはないと思つてます。

作中では、どうしても物語なので、完全否定の形を取らざるをえませんでしたが、私としてはどの宗教も正しい主張を持っていると思います。ただ、それを絶対のものとすることには難があるような気がしますけれど。

作中、後半に差し掛かったあたりで、渡部秀真がカトリック教会の総本山ヴァチカンに出向いて秘密会議に出ていているところ話がありました。

『世界の宗教の行く末を左右するのは、渡部の発する情報なのだ。最も真実に近いのは、実質渡部ただ一人であつて、彼がカトリック教会の秘密会議において、キリスト教の未来についてどんな意見を呈示するかが、世界の信じる道を決める。』

つて部分です。

「秘密会議つて何だよ」

とお思いになられた方も多いとは思いますが、物語上「権威と陰謀」を持つたキリスト教会を描く必要があつたので、こういった設定になつてしまつたつという感じです。

結局、渡辺秀真がヴァチカンの秘密会議でキリスト教の未来についてどんな意見を呈示したかは明確には書かれていませんが、彼がそこでどんな決断を下し、現代の聖書『Shift』を書いたのかは、EPilogue - The Shift を読んで頂いて想像できたかと思います。

というよりも、そこを想像していただけることが作者としての願いでもあります。

・・・という感じで、取り敢えず私が『シフト - 真理を映す目』を読んでいただいた方々に伝えたいことはほとんど書かせてもらいました。

反省点も多く、今後、もっと上手くなりたいということも沢山あります、作者としてそれなりに気に入つたところも多い作品でした。

皆様が少しでも楽しんでいただけたならば幸いに思います。

お時間のある方は、何かご感想をいただければ嬉しいです。

この度は、17歳の未熟な私の、精一杯見栄を張った拙作に最後までお付き合いいただき、誠にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1754p/>

シフト - 真理を映す目 -

2011年9月10日03時27分発行